

論文の和文要旨

論文題目	ネパールと中国 —18世紀における国際関係とトランス・ヒマラヤン・トレード—
氏名	SHAKYA PURNA RATNA

ネパールは1792年に清朝中国と公式関係を築いた。それは1788年と1791年の二度にわたって、清朝の属国であったチベットと戦争した結果であった。二度目の戦争の時にチベットを守るためにヒマラヤ越えをして清朝遠征軍はネパールにやってきた。ネパール軍と清軍はそこで衝突した。最終的に、ネパールと清軍の間に平和協定が結ばれ、結果としてネパールは清朝の朝貢国制度に組み込まれ、ネパールは清朝の新たな朝貢国の一員になった。

ネパールとチベットは何が原因で戦争をしたのか。私のこの研究の目標はこれらの戦争の原因を再定義することにかかわっている。これまで多くの学者は、カトマンズ盆地のマッラ王達が純度の低い貨幣をチベットに輸出し、それが原因になって戦争が起きたと主張してきた。この貨幣原因説が今までの通説になっていた。しかし、この戦争の一方の当事者であった清朝中国側のこれらの戦争に関する記録である『欽定廓爾喀紀略』はこの説を実証しない。また、チベットと通商関係を築くために、1774～1775年の時点でインドからチベットへ渡ってチベット市場を調査したジョージ・ボーグル (George Bogle) 使節団の調査報告も貨幣問題原因説を裏付けない。逆に、清朝中国とイギリスの史料は両方ともに、ゴルカとカトマンズ盆地のマッラ王達とが戦っている間は、カトマンズから従来のように貨幣がチベットに流れてこず、市場に出まわっていた従来貨幣の価値が急騰したと指摘している。従って、ネパールとチベットとの戦争の原因は貨幣流通問題であるという説は成立しない。それなら、貨幣にかわる原因は何であったのか。その答えは、18世紀のネパールの全体的状況に求めなければならない。当時、ゴルカネパールは軍事力に強い国として現れ、その軍事力によってネパールの政治状況は大きく変化した。その変化こそが戦争の真の原因であった。この戦争の原因を実証的に説明するために本論文は序論と結論とを含めて8章で構成した。

序論では、今までネパールとチベットの間戦争の原因として扱われてきた貨幣問題に焦点を当てて議論をすすめる。以前の学者達のほとんどはカトマンズのジャヤプロカシュ・マッラとバクタプールのランジット・マッラ王が純度の低い貨幣を鑄造し、ゴルカ勢力と戦うためにそれをチベットにも大量に輸出したとの見方であった。この章で、中国側の史料とイギリス側の史料を使い、この学説を否定することを試みた。この章で、ネパール統一に伴う軍事行動こそが両国間の戦争の原因の一つであるという結論を導き出した。

第一章では、ゴルカ王プリトヴィ・ナラヤン・シャハの軍事行動を追って議論を進めた。ゴルカ王は最初に、カトマンズ盆地を経由していたトランス・ヒマラヤン・トレードを押さえる行動に出た。この行動の結果、カトマンズ盆地、外国人商人、トランス・ヒマラヤン・トレードにどのような影響及んだかを検証した。同時にゴルカ王によるカトマンズ盆地の東側や西側への領域拡大についても説明した。ここで、この領域拡大にのって、さらなる拡大のためにゴルカの打ち出した政策について触れ、同時にそれによってチベットとシッキムを脅かす結果になったことに着目した。ゴルカの軍事行動とその目的がネパールとチベットとの間の戦争の原因の一つになったと結論づけた。

第二章では、イギリスのトランス・ヒマラヤン・トレードの参入について議論した。イギリスの行動はゴルカの軍事行動の結果として生じた状況の発展のためだった。この章では、

ブータンとコーチ・ビハールの間に起きた戦争にコーチ・ビハール側にたつて軍事干渉を行う機会を得たイギリスのとつた行動について述べた。ここで、イギリスがこの戦争にかかわりをもつ意味合いについても触れ、それがチベットとイギリスの公式関係成立のきっかけにもなったことを指摘した。この関係は新ネパールにとって好ましいものではなかった。この章では、対イギリス関係を巡るネパールとチベットの双方の利害、思惑の対立が原因で両国関係が悪化し間接的に戦争の原因になったと主張した。

第3章では、始めに、トランス・ヒマラヤン・トレードの構造と統一前のネパールやその貿易に関わる国々の商人達にとってこの貿易のもつた重要性について説明した。この章では、特にトランスヒマラヤン・トレードにおけるカトマンズ盆地の役割をクローズアップして説明を進めた。同時に、カトマンズ盆地が貿易中継地になった歴史的背景について簡潔に述べ、統一ネパールとトランス・ヒマラヤン・トレードとの関係にまで繋げていった。グルカ勢力による統一ネパールの警戒は従来のトランス・ヒマラヤン・トレードの構造に制限を加え、これが原因でチベットに悪い影響を与え、チベットはネパールルートに代るルートをシッキムやブータンに開拓しようとした。これがまた、ネパールを挑発し、両国間の関係はこじれるようになった。貿易ルートを開通させるために両国間に1775年に結ばれた条約も無効になってしまった。こうなつた背景にはチベットだけではなくネパール側にも責任があつた。結局両国とも条約の条件を守ることが出来なくなつた。このことが結局、戦争へと発展していった原因の一つである。

第四章ではそのほかの戦争の原因に繋がつた諸要素について議論を進めた。第一には、グルカの軍事行動によって、破壊した統一前のネパールの政治構造について述べた。統一前にネパールに存在していた諸土候国の外交関係はもっぱらチベットに集中していた。グルカの軍事行動はチベットの友好的な外国の仲間を失わせることになつた。結果的にこれによって、チベットが新ネパールとの関係改善に努めることが難しくなつた。チベットは最後までネパールの拡大を認めようとしなかつた。これが戦争原因に繋がる原因の一つとなつた。第二に、新ネパールが統一ネパールをヒンドゥー化したことが仏教国のチベットとの関係を悪化させた。チベット人はネパールがヒンドゥー化されることによって脅威を覚えた。これも、ネパールとチベットが近寄りにくくした要素であつた。第三に、チベットはネパールの軍事行動にブレーキをかけるために、ネパール人が頼つてゐたチベットの岩塩の輸出を止めたことについて述べた。チベットによるこの政策がネパール人の支配者達を挑発した。これも一つの戦争に繋がる要素として働いた。第四に、ネパールに対するチベットの岩塩輸出禁止、ネパール人商人に対する虐待などについてネパールはラサ駐在の清朝の駐蔵大臣に訴えようと試みたが、そこで、チベット人大臣の妨害に遭い、駐蔵大臣とのコミュニケーションは失敗した。これが結果的に、ネパール側がチベットにおける清朝の存在が影響力をもっていないという印象を持った可能性を生んだ。この判断がネパールがチベットとの戦争に踏み切りやすくした状況の一つであつた。最後は、ネパールが、影響力をもつてゐたシャマルパ・ラマ（赤帽派のホトウクトウ）のチベットからの亡命を受け入れたことである。同じく亡命経験をもつてゐたネパールの摂政のバハドゥール・シャハはこれを積極的に引き受けた。バハドゥール・シャハはこれをチベットに影響を及ぼす機会として受けとめた。シャマルパ・ラマのネパール亡命はネパールとチベットの間戦争に大きな要素として働いた。

第5章で、ネパールはどのように戦争に突入し、どのように戦争が進展したかについて議論した。この章では、ネパールのチベット侵略状況を詳しく述べ、後にさまざまな原因で国境線に撤退し、チベット側と条約を結んだことを述べた。この戦争で、乾隆帝は遠征軍を派遣してどのような目標を達成しようとしていたのかを中国の史料を通じて明らかにした。また実際の戦争状況はその目標どおりに進展したか否かについても触れた。この戦争の決着として、遠征軍でもつてネパールを懲らしめ、ネパールを清朝の前に降伏を余儀なくさせ、ネパールを清朝の軍営基地に謝罪にこさせ、かつ清軍のネパール領内での進軍を引き止めさせ、また国境を石を積んだオボで引き、最後に二度とチベット内

に侵入しないという約束を獲得するといった内容の命令を乾隆帝はしばしば遠征軍指揮官に出していた。反対に、清遠征軍指揮官は乾隆帝の命令を深刻に受け止めず、しかも、ネパール軍との衝突を避け、ネパールとチベット間の条約交渉にも参加しなかった。彼等はチベットに戦争賠償金を押し付けるネパール側の主張をチベット側に飲ませた。そのところで、清の遠征軍指揮官たちは、ネパールに再びチベットに戦争をしかけてはいけないというように釘をさすことはなかった。結果として清朝の遠征は無意味なものになる。

第六章では、二度目に起きた1791年のネパールとチベットの戦争を中国の史料に基づいて議論を進めた。二度目の戦争はネパールがチベット側に不満をもったために発生した戦争であった。1788年の戦争の講和条約で決められた戦争賠償金を払うという条件をダライ・ラマ8世は履行しなかった。この章で、ネパール軍によるサキャ僧院への攻撃、タシルンポ僧院の掠奪、そしてその後、ただちにネパール軍が撤退したことに触れた。また、乾隆帝は何のために遠征軍を派遣したのかを述べ、どのようにネパール軍と戦争を交えたのかについても触れた。清軍がヒマラヤ越えをし、ネパール領内で最後の戦いで敗北し、戦争は終了した。これで、清軍とネパールの間で協定が成立した。二度目の戦争の結末ではチベット側が顔を出さず、清朝軍の遠征司令官がチベットに代ってネパールと外交的な取引を行いチベットにおける清朝の存在を見せ付けたのである。

結論では、国家形成に視点をおいてグルカ王の軍事行動を述べた。グルカの軍事行動がネパール統一をもたらした。統一ネパールを維持していくためにグルカ王達はチベット・インドをめぐる外交政策、トランス・ヒマラヤン・トレードの構造に変化をもたらした。同時に国内のばらばらの一般住民をヒンドゥー教といった精神的な絆でまとめていく選択をした。また国家統一を象徴する新たな銀貨幣の導入を決めた。常備軍を設立しその維持もした。これらの諸変化は統一前のネパールの秩序とは異なるものであった。だが、統一前の秩序に慣れていたチベットは新ネパールによる新しい秩序に対して理解を示そうとしなかった。これらの変動の全体が原因あるがゆえに、ネパールはチベットとの戦争を避けることは出来なかったのである。しかし、皮肉にも、この戦争を経て、ネパールは清朝と関係を結び、チャイナカードを入手することによって、インドとの間のバランス外交政策の基礎にすることができるようになったのである。